

のうまんいせきぐんてんのうへたちく  
市原市能満遺跡群天王辺田地区

2 0 1 1

藤本電業株式会社  
市原市教育委員会

# 序 文

千葉県市原市は、温暖な気候と豊かな自然とに恵まれ、遙か旧石器時代の昔から多くの人々が暮らしてきました。市内には数多くの貴重な遺跡が残され、往時の様子を今に伝えていきます。

特に、今回発掘調査を実施いたしました能満周辺は、千葉県指定有形文化財（建造物）である府中日吉神社をはじめとして、中世真言寺院釋蔵院や能満城跡といった中世期の遺跡や文化財が残されている地域です。現集落には、小字で「東宿」や「西宿」といった地名も伝えられており、中世的都市空間の姿を彷彿とさせてくれます。また、平成16年度に実施した能満城跡遺跡の発掘調査では、字「馬場ノ内」に一辺が40mにもなる方形の区画溝が発見され、15世紀～16世紀における中世居館の範囲を具体的に示すことができるようになってきております。

このような中であって、今回の天王辺田地区での発掘調査では、弥生時代後期の集落の広がりや、古墳群の分布などについて新しい知見を加えることができました。また、中世の区画溝の中から発見されました貿易陶磁器は、この地域が、中世の前期後葉頃には重要な役割を果たす地域となっていることを予測させる貴重な文化財と考えることができます。

ここに、『市原市能満遺跡群天王辺田地区発掘調査報告書』を上梓いたします。この報告書が、市原の歴史解明と郷土への深い理解の一助になればと存じます。

最後となりましたが、発掘調査から本報告書の刊行にいたるまで、ご理解とご協力をいただきました藤本電業株式会社、KDDI株式会社北関東エンジニアリングセンター、千葉県教育庁文化財課をはじめ関係諸機関各位に、心より御礼申し上げます。

平成23年3月

市原市教育委員会  
教育長 山崎正夫

# 例 言

- 1 本書は千葉県教育委員会の指導のもと、藤本電業株式会社ならびにK D D I株式会社北関東エンジニアリングセンターのご協力により、調査を委託された市原市教育委員会が主体となり実施した、千葉縣市原市能満 176 番地に所在する「能満遺跡群天王辺田地区」本調査の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査及び整理作業・報告書刊行は、市原市教育委員会生涯学習部市原市埋蔵文化財調査センターが実施し、調査コード番号はセ 451 とし遺物注記番号も同番号を使用した。
- 3 本調査は、宮本敬一が担当した。また、本書の編集・執筆は、近藤 敏（挿図、写真図版）と田所 真（本文執筆）が分担した。  
発掘調査 平成 21 年 7 月 21 日～平成 21 年 7 月 31 日  
整理作業 平成 22 年 4 月 26 日～平成 23 年 3 月 23 日
- 4 出土遺物及び調査資料のすべては、市原市埋蔵文化財調査センターが保管している。

## 目次

### （本文目次）

第 1 章 調査の経緯と概要 .....	1
第 1 節 調査の経緯 .....	1
第 2 節 調査の概要 .....	1
第 2 章 能満遺跡群天王辺田地区の調査成果 .....	4
第 1 節 遺跡の立地と歴史的環境 .....	4
第 2 節 遺構の説明と遺物の出土状態 .....	7
第 3 節 出土遺物について .....	10
第 3 章 調査成果のまとめ .....	13

### （挿図目次）

第 1 図 能満遺跡群天王辺田地区周辺地形図 .....	2
第 2 図 調査区全体図 .....	5
第 3 図 A 区 調査全体図 .....	6
第 4 図 B 区 調査全体図 .....	9
第 5 図 出土遺物（1） .....	11
第 6 図 出土遺物（2） .....	12

### （表目次）

第 1 表 能満遺跡群周辺の遺跡と環境 .....	3
第 2 表 能満遺跡群主要参考文献 .....	3
第 3 表 遺物観察表 .....	14
第 4 表 遺物観察表 .....	14
第 5 表 中世陶磁器等総量一覧 .....	14

### （写真図版目次）

図版 1 遺跡周辺空中写真（昭和 36 年頃） .....	15
図版 2 遺構検出状況 .....	16
図版 3 出土遺物（1） .....	17
図版 4 出土遺物（2） .....	18

# 第1章 調査の経緯と概要

## 第1節 調査の経緯

発掘調査は、市原市能満 176 番地について、携帯電話基地局建設に先立って実施されたものである。調査に至る経緯は、以下のとおりであった。

KDDI 株式会社は、当該地に携帯電話基地局の建設を企画し、市原市教育委員会に対して周知の埋蔵文化財の有無について照会をおこなった。この照会に対して、市原市教育委員会ふるさと文化課(文化財保護班)が、平成 21 年 6 月 16 日に試掘調査を実施したところ、竪穴式住居跡の存在を確認し、文化財保護法に基づく遺跡保存の協議が行われてのものである。協議の結果、文化財保護法 93 条第 1 項の規定に基づき、KDDI 株式会社北関東エンジニアリングセンター長皆川聡より埋蔵文化財発掘の届出が提出されたため、発掘調査による記録保存の措置が講じられることとなったものである。発掘調査は、市原市教育委員会(生涯学習部市原市埋蔵文化財調査センター)が実施することとし、平成 21 年 7 月 7 日付けで、KDDI 株式会社北関東エンジニアリングセンターから市原市教育委員会教育長へ、発掘調査の依頼を行っている。また、翌平成 21 年 7 月 8 日付けにて、KDDI 株式会社北関東エンジニアリングセンター長皆川聡(委託者)と市原市教育委員会教育長山崎正夫(受託者)との間で、埋蔵文化財発掘調査委託契約(委託名:無線基地局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査)を締結し、平成 21 年 7 月 21 日より現地調査を実施したものである。発掘調査では、事業地内で基地局建設に伴って遺跡の保存が回避できない 73m<sup>2</sup>を対象とし、本調査(記録保存の措置)を実施している。調査期間は、平成 21 年 7 月 21 日~平成 21 年 7 月 31 日であった。また、当該発掘調査成果の整理作業並びに報告書の刊行については、別途、平成 22 年 4 月 26 日付けにて、藤本電業株式会社千葉事務所所長森屋和昭(委託者)と、市原市教育委員会教育長山崎正夫(受託者)との間で、埋蔵文化財発掘調査委託契約(委託名:携帯電話基地局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査(整理報告書刊行))(能満遺跡群天王辺田地区))を締結し、平成 22 年 4 月 26 日~平成 23 年 3 月 31 日(履行期限)において実施したものである。

尚、本報告書は、上記経緯によって実施した埋蔵文化財発掘調査の成果を報告したものである。

## 第2節 調査の概要

当該地は、市原市埋蔵文化財分布地図に記載された能満遺跡群の範囲に含まれ、試掘調査の結果や周辺の調査事例、能満城跡主郭部の近隣地であることなどから、小字名をとって能満遺跡群天王辺田地点と名付けたものである。調査の方法は、「千葉県埋蔵文化財発掘調査標準」に準拠した。

調査地点は、中世真言寺院釋蔵院背後の標高 24.5m の洪積台地の縁辺に位置し、東側は山木付近で海岸平野に達する開析谷に面している。試掘調査の結果により、南西 200m に立地する二階台地点の弥生・古墳時代の集落が当該地点にも及んでいることが想定された。

発掘調査は、鉄塔設置部分(A区)と機器設置部分(B区)とに分けて実施した。



第1図 能満遺跡群 天王辺田地区周辺地形図

第1表 能満遺跡群周辺の遺跡と環境

群	遺跡群名	NO.	遺跡の名称	出典図書	内容
能満遺跡群		1	天王辺田地区	-	弥生時代後期集落、古墳時代墳墓、中世区画溝
		2	能満城跡(城山地区)	10 19	釈蔵院文書(市指定文化財)に「郷城」とあるのはここか。
		3	釈蔵院	13 19	
		4	府中日吉神社	13	千葉県指定文化財(建造物)。室町期三間社流造。
		5	地楽寺地区	22	古墳時代前期前半の竪穴住居跡1軒と柱穴群を検出。
		6	二階台地点	12	弥生時代後期、古墳時代後期、竪穴住居跡5軒を検出。
		7	能満城跡遺跡(13年度)	16 17	台地斜面の方形区画墓域と五輪塔を伴う塚、東西方向の溝を検出。
		8	能満城跡遺跡(16年度)	20 21	15~16世紀の中世の4.0m四方の方形屋敷溝。近世の屋敷地。
		9	馬場ノ内館跡	15	狭義の能満城跡を字城山地区(16世紀)として、一町×二町の方形区画を馬場ノ館跡としている。
郡本遺跡群 (古甲・門前地区)		10	郡本遺跡(第9次)	24	19年度不特定遺跡。奈良平安時代竪穴住居跡1軒、中世土坑1基。
		11	郡本遺跡(第10次)	23	弥生時代後期竪穴住居跡1軒、中世掘立柱建物跡1棟、五輪塔出土土坑
		12	郡本遺跡(第11次)	23	中世の土坑1基など
		13	古甲遺跡(第2次)	2	平成4年度調査。東西方向の大溝を検出。上辺8m、下辺4m、深さ2m。最終段階は、中世後半か。
		14	古甲遺跡(第1・3・4次)	4 5 7	平成6~7年度調査。弥生時代後期竪穴住居跡2軒、奈良平安時代竪穴住居5軒、掘立柱建物跡4棟など
		15	古甲遺跡(第5次)	7 11	奈良時代竪穴住居跡・掘立柱建物跡など検出。建物重複。銅製品・墨書土器(市原)など出土。
郡本遺跡群 (郡本地区)		16	古甲遺跡(第5次)	7 11	奈良時代竪穴住居跡・掘立柱建物跡など検出。
		17	市原郡衙推定地	7 14 18	弥生時代後期竪穴住居跡1軒、奈良平安時代竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡1棟など。
		18	郡本遺跡(第2・4次)	3 6 8	平成6年度調査など。弥生時代後期竪穴住居跡16軒、奈良平安時代竪穴住居跡10軒、掘立柱建物跡5棟などを検出。
		19	郡本遺跡(第1次)	1	昭和61年度調査。弥生時代後期竪穴住居跡3軒、奈良平安時代竪穴住居跡5軒を検出。
		20	郡本遺跡(第5次)	9	弥生時代中期・後期竪穴住居跡3軒、奈良平安時代竪穴住居跡3軒、東西の溝状遺構などを検出。

第2表 能満遺跡群主要参考文献

no.	著者編著者	刊行年	出典	文献	刊行機関
1	木對和紀	1987	『市原市郡本遺跡』(第1次)	市原市文化財センター調査報告第14集	(財)市原市文化財センター
2	高橋康男	1994	市原市 上総国府推定地確認調査報告書(1)	市原市文化財センター調査報告書第53集	(財)市原市文化財センター
3	田中清美	1995	『市原市郡本遺跡(第2次)』	市原市文化財センター調査報告書第56集	(財)市原市文化財センター
4	田所 真	1997	『郡本遺跡群(古甲遺跡第3次)』	『市原市文化財センター年報平成6年度』	(財)市原市文化財センター
5	田所 真	1998	『郡本遺跡群(古甲遺跡第4次)』	『市原市文化財センター年報平成7年度』	(財)市原市文化財センター
6	小川浩一	1998	『市原市郡本遺跡(第3次)(第4次)』	『平成9年度市原市内遺跡発掘調査報告』	市原市教育委員会
7	田所 真	1998	『市原郡衙関連遺跡(郡本遺跡)』	『千葉県の歴史』資料編考古3(奈良平安時代)	千葉県
8	鶴岡栄一	1999	『市原市郡本遺跡(第4次)』	市原市文化財センター調査報告書第61集	(財)市原市文化財センター
9	北見一弘	1999	『郡本遺跡(第5次)』	『平成10年度市原市内遺跡発掘調査報告』	市原市教育委員会
10	小高春雄	1999	『能満城跡』	『市原の城』	小高春雄
11	田所 真	2000	『郡本遺跡群(古甲遺跡第5次)』	『市原市文化財センター年報平成8年度』	(財)市原市文化財センター
12	牧野光隆	2001	『能満遺跡群二階台地点』	『平成12年度市原市内遺跡発掘調査報告』	市原市教育委員会
13	小川 信	2001	『中世都市「府中」の展開』	思文閣史学叢書	株式会社思文閣出版
14	田所 真ほか	2003	『郡本遺跡群(市原郡衙推定地)』	『平成14年度市原市内遺跡緊急発掘調査概要』	市原市教育委員会
15	小高春雄	2003	『千葉県における地域別城郭研究史 市原市域』	『千葉城郭研究』第7号	千葉城郭研究会
16	近藤 敏	2004	『能満城跡遺跡(13年度)』	『市原市文化財センター年報平成13・14年度』	(財)市原市文化財センター
17	近藤 敏	2004	『能満城跡遺跡(14年度)』	『市原市文化財センター年報平成13・14年度』	(財)市原市文化財センター
18	相京邦彦ほか	2004	『市原市郡本遺跡』	千葉県文化財センター調査報告書第491集	(財)千葉県文化財センター
19	佐藤博信	2004	『高野山『西門院文書』の再検討』	『千葉史学』45	千葉史学会
20	近藤 敏	2005	『能満城跡遺跡(16年度)』	『市原市文化財センター年報平成15・16年度』	(財)市原市文化財センター
21	近藤 敏	2006	『能満城跡遺跡(16年度分補遺)』	『市原市文化財センター年報平成17年度』	(財)市原市文化財センター
22	大村 直	2006	『能満遺跡群地楽寺地区』	『市原市文化財センター年報平成17年度』	(財)市原市文化財センター
23	牧野光隆	2009	『郡本遺跡群(第8次・第10次・11次)』	『平成20年度市原市内遺跡発掘調査報告』	市原市教育委員会
24	近藤 敏	2010	『市原市郡本遺跡群(第12次)』	市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第14集	市原市教育委員会

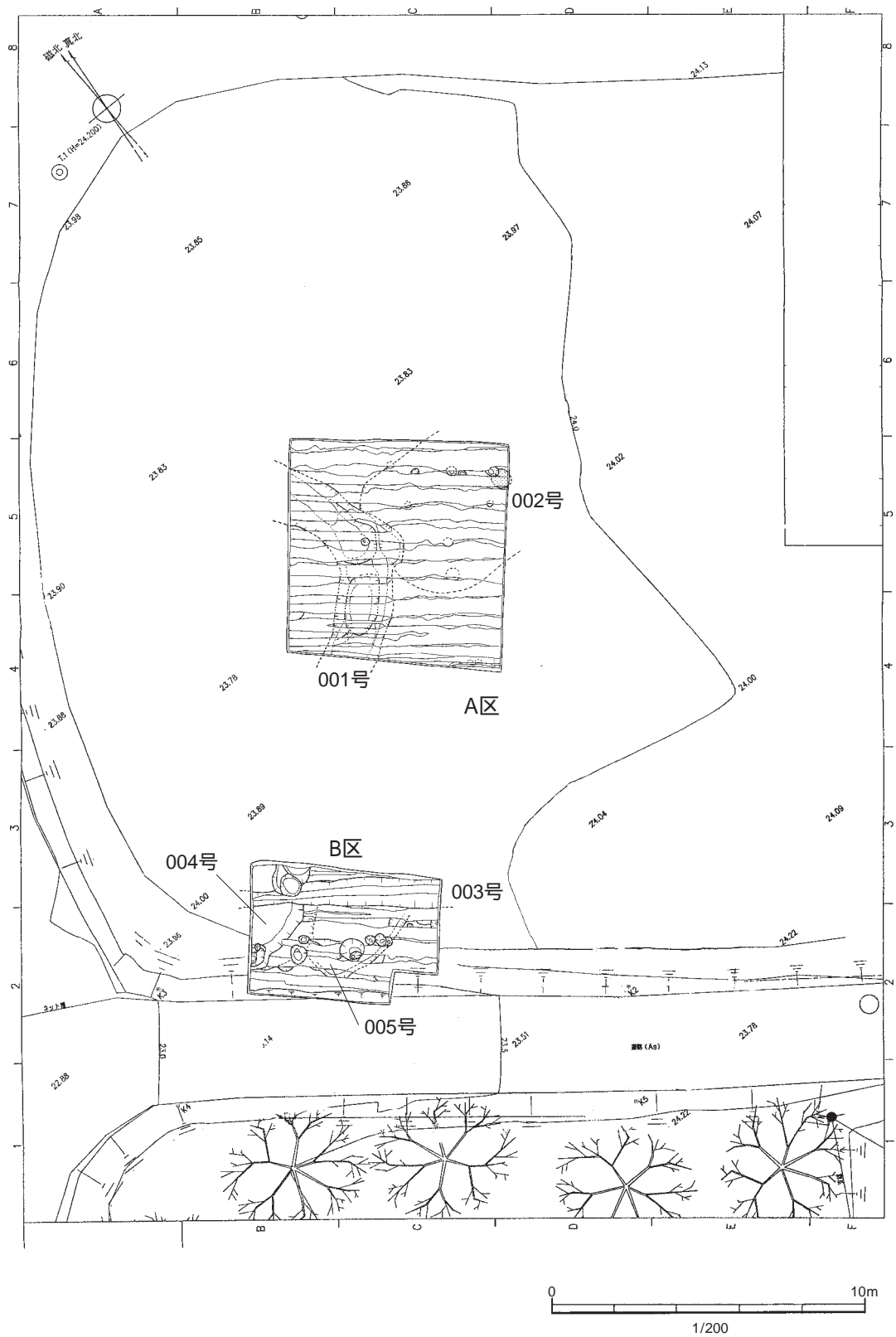
## 第2章 能満遺跡群天王辺田地区の調査成果

### 第1節 遺跡の立地と歴史的環境（第1図/第1表・第2表参照）

能満遺跡群天王辺田地区の調査地点は、第1図に示した位置にあたっている。

遺跡群全体は、概要にも触れたとおり、山木辺りで海岸平野に達する開析谷によって取り囲まれた洪積台地上に立地している。また、同開析谷は、台地北端の字「下夕田」辺りで三方に枝分かれしており、能満の台地をほぼ中央で東西に二分している。現在の集落配置をみると、この中央部分の谷に面した台地裾部に展開する一群と、洪積台地上にあつて南端部に近い範囲に集住する一群とに分けることができる。そこで、台地上の小字から土地利用形態を推測してみると、まず、東半の台地上では、中央部分に北から「北平台」「中平台」「南平台」と続く。それらの、東側には「月輪寺」「天神台」とあつて現在では知られていない寺社の存在を伺わせている。「中平台」の西隣には「居心城」の字が遺されている。「平台」は、「居心城」を取り囲むように確保された平場とみることができよう。但し、「居心城」に、明確かつ堅牢な城郭遺構は発見されておらず、むしろ、西側開析谷を挟んだ「城山」に南側を土塁で守られた城郭遺構が現存しているのである。「南平台」「天神台」の南接部から、現集落の範囲と重なる。「南平台」の南隣には「馬場ノ内」、天神台の南隣には「堂場」、さらにこれらの南隣には「東宿」が展開している。現在「馬場ノ内」の北東端に知られる天神社は小祠であるが、境内北東隅が小字「天神台」に接しているところをみると、旧来は「天神台」に祀られていたものと推測することができよう。「馬場ノ内」では一部発掘調査（8能満城跡遺跡（16年度））も実施されており、15～16世紀の方形居館の区画溝（想定一辺40m）が発見されている。「東宿」の西隣は「西宿」であり、更に西方に「地楽寺」「宮ノ前」が続いている。台地上の集落は、「馬場ノ内」から「西宿」の範囲に展開している。興味深いのは、「西宿」の北側に「新ノ宿」が認められることである。「新ノ宿」の位置は谷地形の中にあつており、先に触れた台地裾部に展開する集落の一群は、台地上の一群に比べて新しく形成されたものであることを伺わせているからである。また、「西宿」を西端として、洪積台地西半部分に集落の展開が全く認められていないことも、注目すべき点であろう。南端に「地楽寺」「宮ノ前」と続き、北側に、「二階台」「城山」「天王辺田」と展開している。「宮ノ前」に鎮座する府中日吉神社は、室町時代の神社建築として千葉県指定文化財に指定されており、その建築年代は15世紀末葉ないし16世紀初頭と考えられている。（『千葉県指定有形文化財 府中日吉神社本殿修理報告書』昭和62年市原市教育委員会）また、「城山」に城郭遺構の知られることは、先に触れたとおりである。縄張り構造などからみて、16世紀の所産であろう。また、「二階台」の西側台地縁辺部には、釋蔵院が現存している。釋蔵院には永正十年（1513）から明治元年（1868）にいたる古文書が現存しており、このうちの102通が中世文書である。文書の内容は、主に、新義真言宗における傳法許可に関わるものであるが、これによって同寺が真言密教寺院であったことが明らかとなっている。

さて、このように見てくると、能満の台地は、東西に寺社を配し、中ほどに城郭あるいは主殿等の居館を配して、さらに南に東西の宿を置く中世的都市景観の広がっていた地域であることがわかる。時期的には、16世紀前半を中心とするが、天王辺田地区からは、これを遡る磁器が出土している。

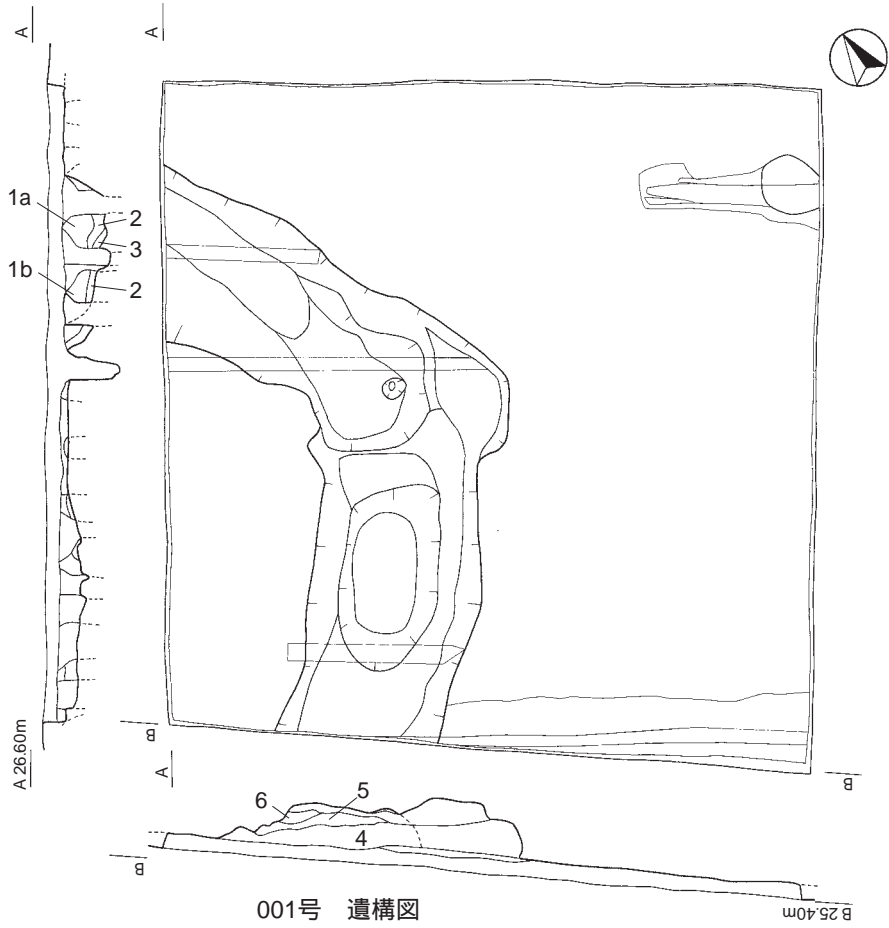


第2図 調査区全体図

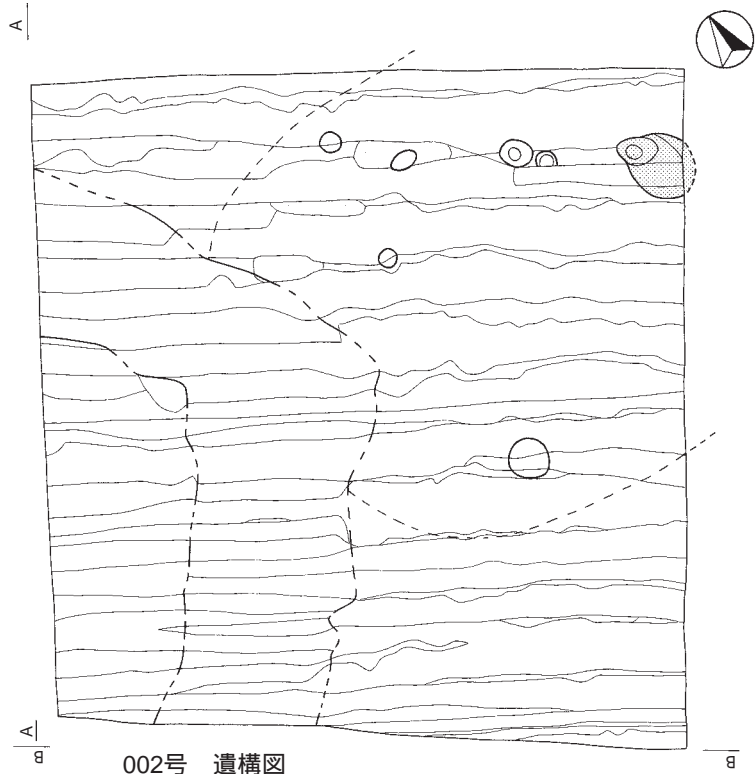


001号 土層説明

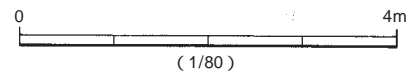
- 1a層 混ローム粒暗褐色土層
- 1b層 混ローム粒暗褐色土層  
1a層より明色
- 2層 混ローム・黄褐色土の  
暗褐色土層
- 3層 混ロームブロック、暗褐色土の  
黄褐色土層
  
- その他はコボウトレンチャー  
耕作の為攪乱
  
- 4層 混木炭、焼土粒、  
ローム粒の暗褐色土層
- 5層 6層よりやや暗色の  
黄褐色土層
- 6層 混ロームブロック  
黄褐色土層  
(ソフトローム?)



001号 遺構図



002号 遺構図



## 第2節 遺構の説明と遺物の出土状態（第2図～第6図）

発掘調査は、鉄塔建設部分にあたるA区と、機器設置部分にあたるB区とに分けておこなった。

調査対象地のほぼ中央部分に、調査区（A区）を設置した。調査区の規模は、約7m四方である。調査区全域にわたって、牛蒡の作付痕跡が認められており、遺構の遺存度は極めて悪かった。A区からは、溝状遺構（001号）と、竪穴住居跡（002号）が検出されている。

また、調査対象地の南西寄りに、調査区（B区）を設定した。調査区の規模は、一部分を欠くが、概ね、7m×4mである。B区についても、調査区全域にわたって、牛蒡の作付痕跡が認められており、遺構の遺存度は極めて悪かった。B区からは、区画溝（003号）、大型土坑（004号）、その他性格不詳な遺構・ピット類が検出されている。

いずれの調査区においても、遺構確認面までは、概ね、50cm～60cmの深さであった。これには、牛蒡収穫時のトレンチャによる掘削痕跡が影響しているものと考えられる。

001号遺構は、調査区A区西寄りに検出された溝状遺構である。遺構確認面における溝の幅員は、おおよそ、1.6m～2.0m。深さは、0.5m程度であった。溝底面の形状は丸底であるが、平面的には楕円形の土坑が連続したような形態を示している。古墳の周溝の可能性が考えられるが、円墳か、丸みを帯びた方墳のコーナーかは、はっきりとさせることができなかった。円墳と仮定した場合、直径4.5m程度の小規模墳に復元することができるが、明言できない。調査担当者は、むしろ、丸みを帯びた方墳の可能性を指摘している。本遺構（001号）が古墳の周溝であった場合、いずれの墳形であっても、墳丘の規模と周溝の幅員との比率を考慮すると、周溝幅の広い古墳とすることができよう。本遺構の帰属時期を明瞭に示すことのできる遺物は出土していない。しかし、外面に丹彩を施す杯などの小片（第6図1と2）がA区内から出土しているほか、後述するB区土坑内からも同様の遺物が発見されていることから、001号溝状遺構の帰属時期は、これらまたはこれらに近い時期とみることができる。

この他、覆土中からは、縄文早期（条痕紋系）の土器片が出土しており、周囲に、この時期の遺構が存在していた可能性を示している。

002号遺構は、調査区A区東寄りに検出された竪穴住居跡である。本遺構については、前述でも明らかのように、調査区全域がトレンチャによって筋状の削平を受けていたことと、遺構確認面が既に、住居跡の床面直上にあたっていたことなどから、平面規模を明瞭に把握することが困難であった。従って、遺構のプラン等については、トレンチャ上端部に残る痕跡から、現地において想定しえたに過ぎない。想定される住居跡のプランは、長軸をほぼ東西にとる小判型である。床面の確認状況から、001号遺構に一部切られていることが明らかとなっている。柱穴の位置も、不詳であった。但し、当該調査区からは、弥生時代後期の土器片が相当数出土しており、このうち、A区出土のものは、002号遺構の帰属時期に伴うものと考えることができよう。弥生時代後期の資料は、調査区B区でも出土している。

能満遺跡群におけるこれまでの発掘調査事例からみると、弥生時代から古墳時代にかけての遺構は、二階台地点（第1図）と地楽寺地区（第1図）とで確認されている。即ち、二階台地点では、弥生時代後期ならびに古墳時代後期の竪穴住居跡5軒を検出しており、地楽寺地区では、古墳時代前期前半の竪穴住居跡1軒と柱穴群を検出している。これらの事例に、今回の調査資料を加えて考えると、当該期の集落ならびに墳墓は、台地西半部に広く展開していたものと想定することができる。

003号遺構は、調査区B区北側に検出された溝状遺構である。遺構確認面における溝の幅員は、広い所で0.9m、狭い所では0.4mであった。また、深さは、最深部で0.9mとなっている。底面は、断面形においてやや丸みを帯びているが、概略箱型を意図したものであろう。平面形において溝の幅員に広狭が認められるのは、004号遺構によって上面が削平されているためであり、当初の幅員に大きな差があったものとは考えられない。溝状遺構は直線的に延びており、その方位はN 58° Wであった。この溝の振れは、調査対象地西南側に通る現道とほぼ一致している。また、本調査区南西200mの地点に知られる「城山」の城郭遺構南端土塁塀の向きとも類似している。将来的には、双方の関連性を検討する必要がある。尚、現在の地形でも、調査区南西の現道は南東に延びている。現道との距離は、芯々間で大よそ5mを計測する。また仮に、005号遺構の南側に認められる落ち込みを、003号遺構と対をなす溝と仮定した場合で、更に、溝の規模を同等と考えた場合には、溝間の距離が4.2m程度に復元されよう。今後の調査でこれらの有機的な関係等が明らかになることを期待したい。遺構の最下層埋没土は暗灰色土を主体としており、木炭粒の混入を特徴としている。他地点での類似遺構との比較において、一つのメルクマールとなり得よう。遺構間の切り合い関係では、004号遺構に切られており、003号遺構 004号遺構であることが、明らかとなっている。次に、遺構の帰属時期についてみると、本遺構からは、口縁端部を外側に折り返した緑釉鉢の破片(挿図第6図20)が出土している。本遺構の類例は、上総国分僧寺跡627号遺構から出土している。また、005号遺構出土とされているが、本調査区からは白磁の合子(挿図第6図21)も出土している。これらは中世前期(12~13世紀)における貿易陶磁と考えられ、003号遺構の帰属時期や性格を考える上で参考となろう。

004号遺構は、調査区B区西側に検出された大型の土坑である。遺構の全容は不明であるが、確認された範囲でも長辺で3mを超え、短辺でも1.7mを超えた土坑となっている。遺構の深さは、確認面から0.7m程度であり、底面は平底を呈している。遺構最下層の埋没土は灰褐色を主体としており、ローム粒子が混入している。灰色系の覆土であることは、003号遺構との類似性を伺わせているが、003号遺構の一部を切っている(挿図第3図上段土層観察図)ことは、既に報告したとおりである。004号遺構の帰属時期を明らかとする遺物は出土していないが、遺構の切り合い関係から、中世前期以降の土坑である。

005号遺構は、調査区B区のほぼ中央で確認された浅い落ち込み状の遺構である。本遺構の近辺からは、縄文晩期安行式の粗製土器以降、弥生時代後期、古墳時代、平安時代、中世にいたる各時代に及ぶ遺物が出土しており、その帰属時期と性格を明らかにすることはできなかった。

以上、遺構NO.を付したものの他にも、調査区A区、B区共に、ピット上の掘りこみなどを検出したが、文頭にも触れたとおり、調査対象地全域にわたって、牛蒡の作付ならびに収穫時の痕跡が認められていたため、その性格や時期などを特定することができなかった。また、検出されたピットについても、埋没土に締りが全く認められないものもあり、不詳とせざるをえなかった。

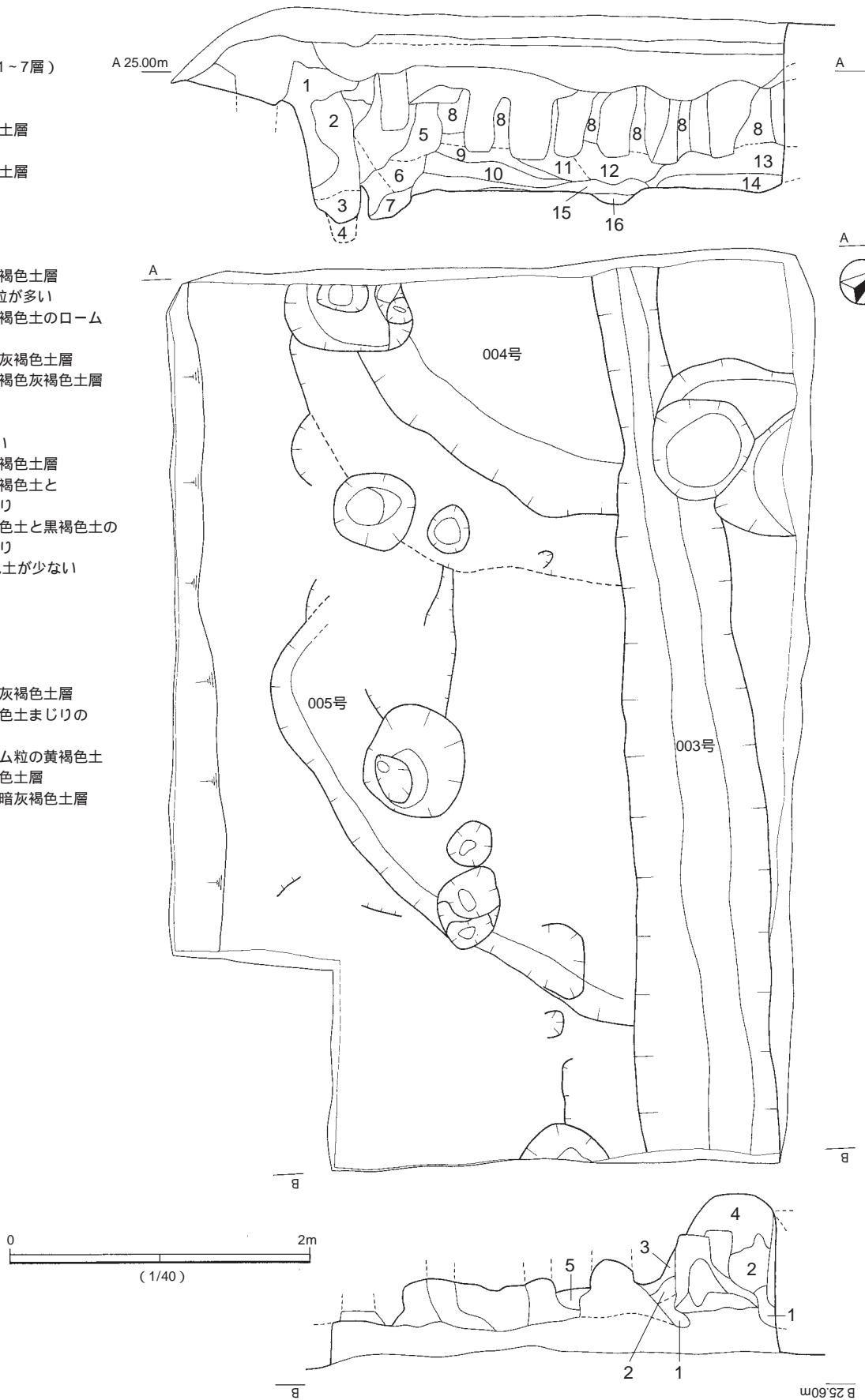
出土遺物については後節に纏めるが、トレンチャによって移動している遺物も相当量あったものと考えられる。また、現地表面そのものが、一部削平を受けていた可能性もあり、遺構の遺存度が極めて悪かったことを指摘しておきたい。恐らくは、縄文晩期の集落も、本調査地区に展開していたものと考えられる。但し、古墳時代後期で、本地区の遺跡は一度消滅するか希薄となるのであろう。平安時代後期以降に再び土地利用が図られ、中世に続いていくものと思われる。

004号 土層説明  
004号より新しい遺構(1~7層)

- 1層 混少量ロームの  
黒褐色+灰褐色土層
- 2層 混ローム  
黒褐色+灰褐色土層
- 3層 混少量ローム  
黒褐色土層
- 4層 混ローム  
黒褐色土層
- 5層 混ローム粒暗灰褐色土層
- 6層 5層よりローム粒が多い
- 7層 混黄褐色、暗灰褐色土のローム  
ブロック層
- 8層 混ローム粒の暗灰褐色土層
- 9層 混ローム粒の暗褐色灰褐色土層
- 10層 9層とほぼ同じ
- 11層 9層の暗色土層
- 12層 9層の灰色が多い
- 13層 混ローム粒暗灰褐色土層
- 14層 混ローム粒の暗褐色土と  
灰褐色土のまじり
- 15層 混ローム粒暗褐色土と黒褐色土の  
灰褐色土のまじり
- 16層 15層より黒褐色土が少ない

003号土層説明

- 1層 暗褐色土層
- 2層 混少量ローム粒灰褐色土層
- 3層 混ローム粒黄褐色土まじりの  
暗褐色土層
- 4層 混木炭粒とローム粒の黄褐色土  
まじりの暗灰褐色土層
- 5層 混少量ローム粒暗灰褐色土層



第4図 B区 全体図

### 第3節 出土遺物について（第5図～第6図・遺物観察表）

能満遺跡群天王辺田地区の調査では、縄文土器、弥生土器、土師器、中近世陶磁器、礫、瓦片、釘、鉄滓が出土している。本調査区の出土遺物については、遺構範囲内から出土したものであっても、前節に述べたとおり、後世の攪乱（牛蒡の作付痕跡）による移動が著しく、多くの遺物について、原位置を保っていない可能性が予想された。遺構との共伴関係に不確実性が高いと言える。このことから、本節では、出土重量とその頻度などから、当該調査区内の傾向を予め予測しておくこととしたい。

出土遺物の総重量は、2759.1gであった。また、各遺物の総重量並びに出土率は以下のとおりであった。縄文土器晩期（95.8g / 3.47%） 弥生土器後期（422g / 15.29%） 古代土師器（古墳時代前期・平安時代後期）（857g / 31.06%） 土師器・カワラケ（1063.1g / 38.53%） 中近世陶磁器（51.3g / 1.85%） 礫（221.2g / 8.01%） 瓦片（37.6g / 1.36%） 釘（1.1g / 0.03%） 鉄滓（9.7g / 0.35%）

尚、瓦片～鉄滓は各1点の出土である。更に、縄文土器と弥生土器の、A区とB区における出土頻度を、調査区面積（A区49m<sup>2</sup>、B区約26m<sup>2</sup>）比（A:B=1.88:1）を係数として比較してみると、縄文土器（A区59.9g÷1.88=31.86g、B区=35.9g） 弥生土器（A区126.9g÷1.88=67.5g、B区=295.1g）となった。また、中世陶磁器等のみを抽出した場合、貿易陶磁2点（29.5g） 渥美産陶器1点（7.5g） 常滑産陶器4点（67.2g） 瀬戸・美濃系陶器2点（44.8g） 在地産カワラケ5点（80.7g）であった。貿易陶磁については、前節でも触れた通り、緑釉鉢（中国南部産）13世紀、白磁合子（中国産）12世紀の2点であった。このことは在地産カワラケが、上総国分僧寺期以降であることとも呼応している。これらのデータについて、前節で述べた遺構の状況を勘案しつつ瞥見してみると、以下のように整理することができよう。

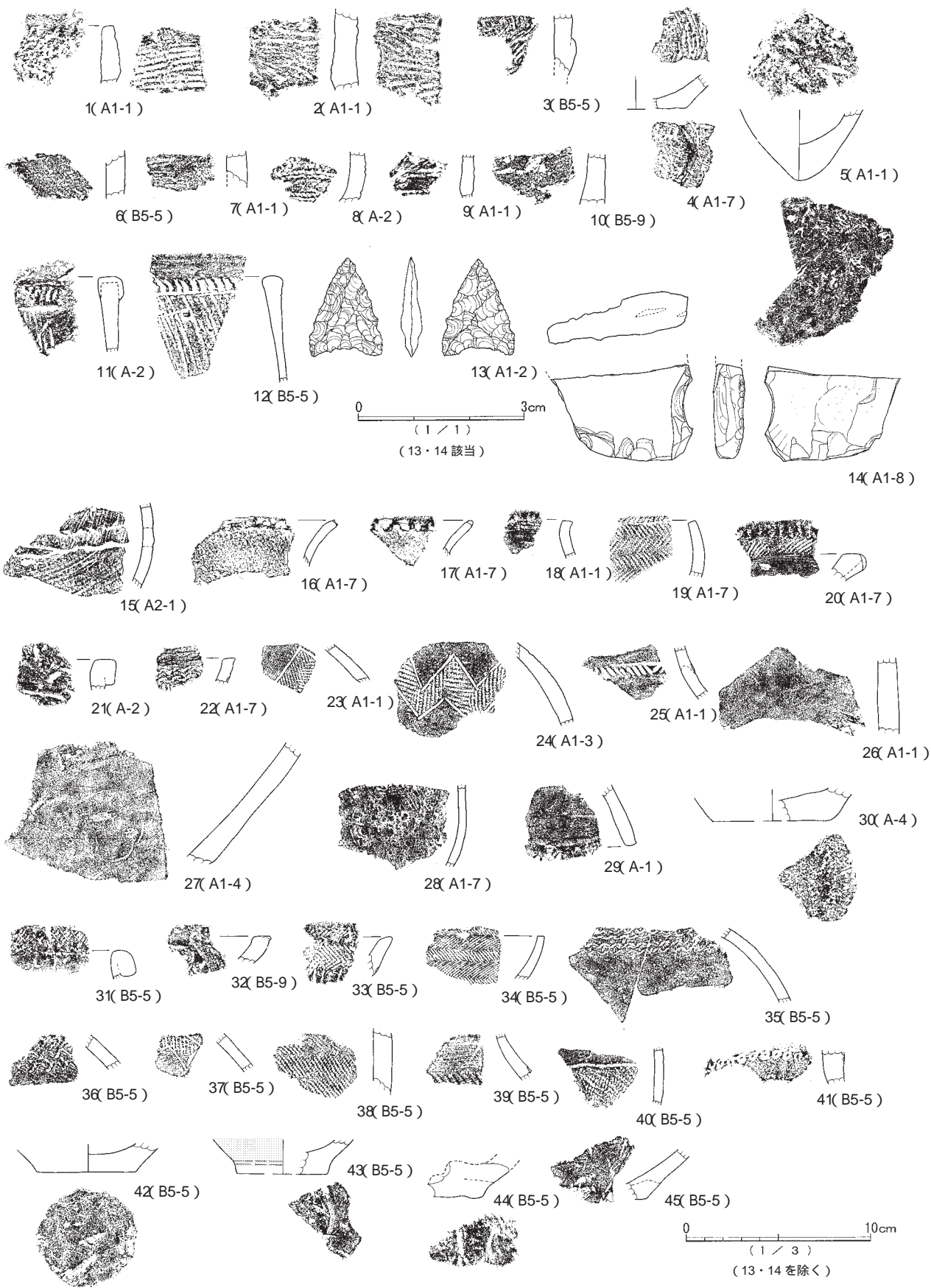
まず、時代的変遷では、縄文時代早期以降、不連続ながらも、中世に至るまでの変遷が追える。縄文時代では、早期と晩期に特化している。尚、遺構は検出されなかった。

弥生時代では、後期の集落が当該地区に広がっていることを確認することができた。住居跡の検出されたA区よりも、非検出なB区の方が遺物の出土頻度が高いことを指摘しておきたい。

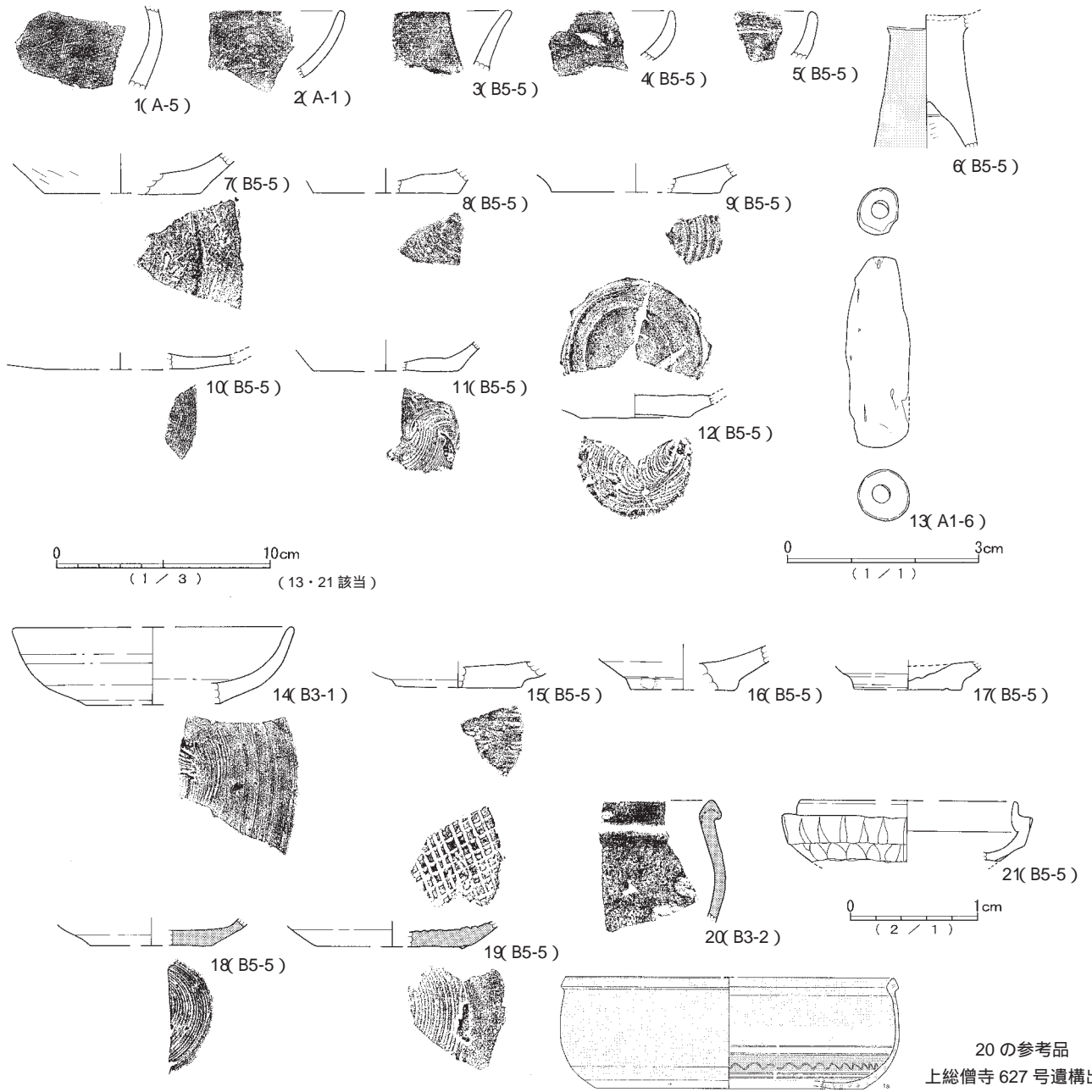
古墳時代では、前葉の土師器を確認しているが、後期の土師器や須恵器が認められなかった。奈良時代から平安時代前期の土師器は、認められていない。

平安時代後期以降に再度、能満地区の土地利用が進められるようになり、中世前期（鎌倉時代）に一つの画期を形成していることが伺われる。

中世陶磁器類の出土地点による比較では、渥美産や常滑産の陶器類がA区から出土しているのに対して、貿易陶磁や瀬戸・美濃系陶器と在地産カワラケは、B区から出土している。更に、出土遺構に注目すると、A区では当該期の遺構が確認されていないのに対して、B区では003号遺構や005号遺構が、当該期の可能性を示している。この際、注目すべき点は、004号遺構（大型土坑）からの出土が認められないことである。



第5図 出土遺物(1)



第6図 出土遺物(2)

### 第3章 調査成果のまとめ

能満遺跡群天王辺田地区の調査では、弥生時代後期の竪穴住居跡1棟、古墳時代の古墳1基、中世の区画溝1条、大型土坑遺構1基などを検出し、記録保存の措置を講ずることができた。但し、第2章にも触れているとおり、調査対象地にはかつて、牛蒡が作付されたことがあったようで、全域にトレンチャによる攪乱が認められていた。そのため、不詳とせざるを得ない部分も多くあった。

しかし、能満遺跡群全体の調査経歴を振り返ってみると、第1章でも整理したように、その大半が、南半中央部分の道路建設に先立つ発掘調査成果であって、東半にいたっては全くといってよい程、調査の手が伸びていないのが現状である。また、今回の発掘調査区を含む、西半地域についても、府中日吉神社解体修理に伴う基壇部発掘調査を含めても、個人住宅建設等小規模開発に伴う発掘調査のみが行われてきているのであって、今回の調査は、貴重な調査例の追加となったものと言える。今回の調査によって、能満遺跡群に対する理解がより大きく進展したことは、言うまでもない。本章では、そのまとめとして、個々の成果の中から、代表的な2例を挙げて整理しておくこととしたい。

まず第1点目は、弥生時代から古墳時代の遺跡の広がりについてである。

これまでの発掘調査成果でも、二階台地点（天王辺田地区南東約200m地点）や地楽寺地区（天王辺田地区南東約350m地点）から、弥生時代後期から古墳時代後期にかけての集落が発見されている。また、能満遺跡群のほぼ中央部にあたる能満城跡遺跡の調査では、中世の遺構群によって壊された古墳の周溝跡も発見されているのであって、これらの集落や墳墓群の広がりが、遺跡群西北の当該地にまで至っていることを、資料によって確認することができたのである。本遺跡群の場合、遺跡分布の踏査結果では、古墳群の存在を明瞭に把握することはできていなかった。これは、恐らく、中世の段階に当該地域が相当規模の開発を受けることとなって、それまでも遺されてきたであろう古墳の墳丘などが削平されてしまったことに起因するものであろう。

第2点目は、中世的都市空間の広がりや形成時期並びに形成過程についてである。

能満遺跡群の展開する能満台地については、かつてより、中世的都市空間の復元が可能な地域として注目を浴びてきている。また、台地上の日吉神社が「府中」を冠していることから、上総国府推定地の一か所としても注目を浴びてきているところであった。このことは、能満の西寄り開析谷の中に「甲田」の地名が残ることや、谷の更に西隣の台地上に「古甲」の地名が残っていることから、国府の所在を予測することができるからである。但し、一般的にみて、「甲」（こう）が国府に繋がる地名であるとしても、国衙を「府中」と呼称するのは中世以降の用例であることから、中世段階での国衙機能所在地という理解を大前提とすることが、近年の動向と言える。この意味において、能満地区の「府中」用例も、同様の理解が可能であろう。ところで、第1章にも触れたように、能満台地上における中世的都市空間は、台地中央の「東宿」「西宿」地名などが遺されている地域に集中しているであり、その広がりが西半の天王辺田地区にまで及ぶとは予想されていなかったのではないであろうか。また、中世的都市空間の成立時期についても、従前の調査成果から見ると、十五世紀、即ち、室町時代以降を念頭においてきた帰来がある。この点、今回の調査では、新しい所見を提示するきっかけを示すことができているものと思われる。従って、この点を成果として指摘しておきたい。







●  
調査地層

遺跡周辺 空中写真（昭和36年頃）



A区 全景



A区 001号



001号 B-B 断面



001号 A-A 断面



B区 全景 北西方向



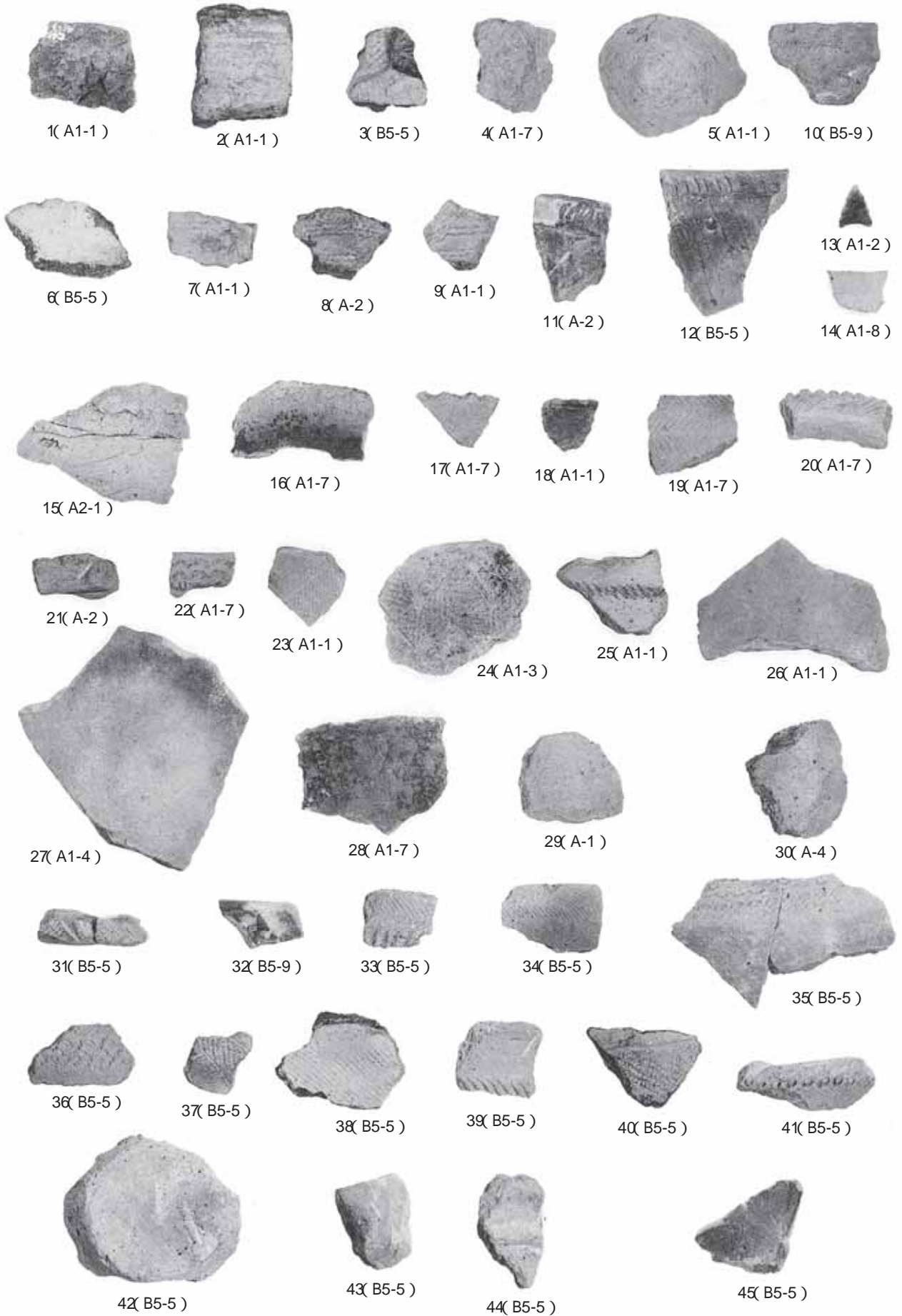
B区 全景 南東方向

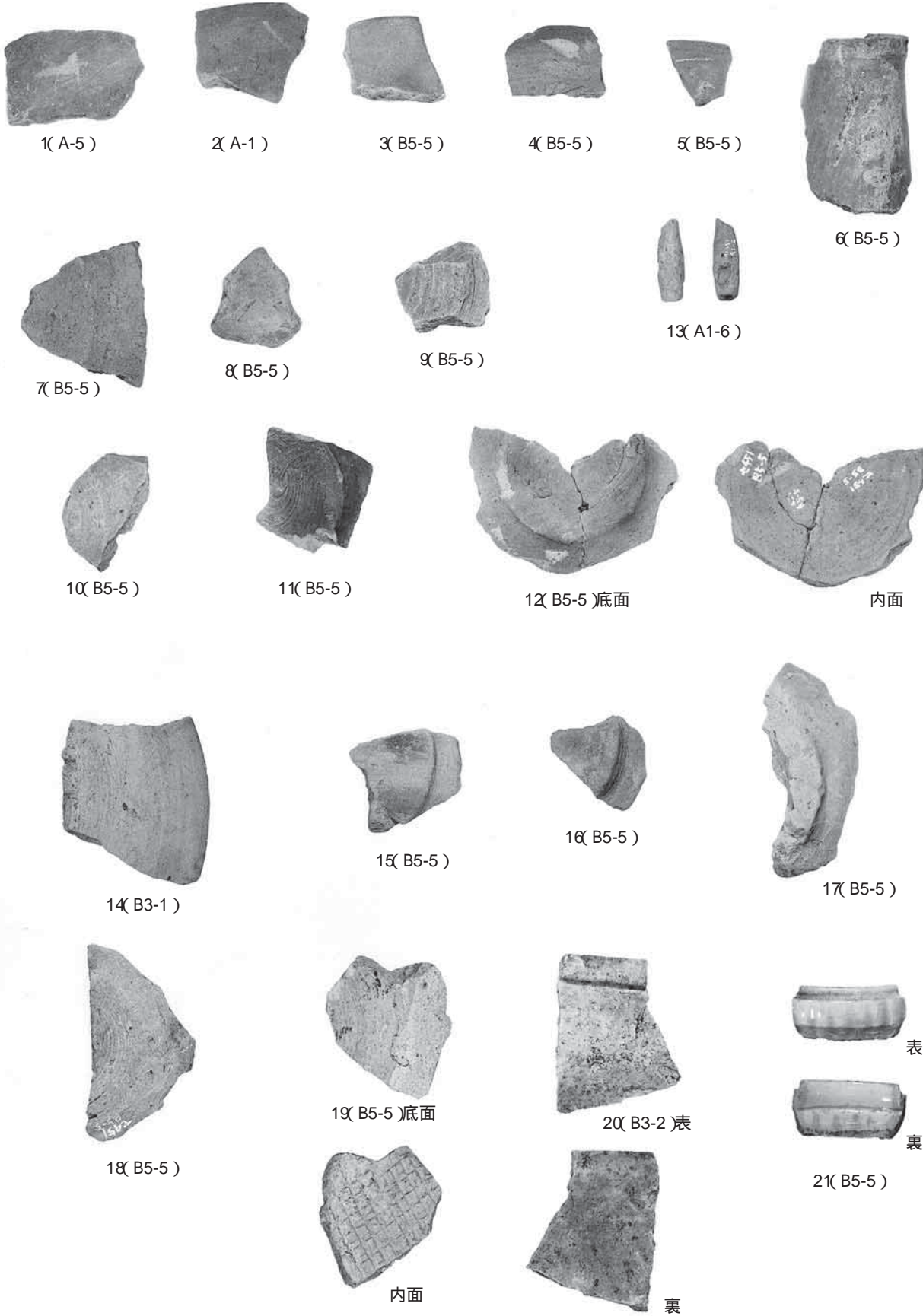


B区 004号 A-A 断面



B区 003号 B-B 断面





## 報告書抄録

ふりがな	いちはらしのうまんいせきぐんでんのうへたちく							
書名	市原市能満遺跡群天王辺田地区							
副書名								
巻次								
シリーズ名	市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書							
シリーズ番号	第18集							
編著者名	近藤 敏 田所 真 宮本敬一							
編集機関	市原市埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒290-0011 千葉県市原市能満1489番地 TEL 0436(41)9000							
発行年月日	2011年3月23日							
ふりがな	ふりがな	コード		世界測地系		調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経			
のうまんいせきぐんで 能満遺跡群天 んのみたちく 王辺田地区	いちはらしのうまん 市原市能満176	12219	セ451	35° 30′ 58″	140° 07′ 48″	20090721 ～ 20090731	73㎡ 本調査	携帯電話基地局建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
能満遺跡群辺 田地区	包蔵地	弥生時代後期 古墳時代後期 中世前期	竪穴住居跡1軒 周溝（方墳か） 区画溝1条、大型土坑1基		縄文土器、縄文時代石器、弥生 土器、古墳時代土師器、中世土 師質土器、中世陶磁器、鉄釘、 鉄滓		中世前期の貿易陶磁 （白磁合子、緑釉 鉢）が出土してい る。	
要約	<p>中世真言寺院積蔵院背後の標高24.5mの洪積台地縁辺に位置し、東側は山木付近で海岸平野に達する開析谷に面している。調査では、弥生時代後期の竪穴住居跡と、古墳時代の方墳と考えられる周溝の一中世のV字溝や大型土坑が発見されている。遺跡の性格を特定するには至らなかったが、能満城跡との関連が想定される遺構である。また、出土品の中には、12、13世紀の白磁合子や緑釉鉢などの中国製高級陶磁器の破片が含まれており、当該期の当地域の重要性をうかがわせている。</p>							

市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第18集	
<b>市原市能満遺跡群辺田地区</b>	
平成23年3月17日印刷 平成23年3月23日発行	
編集	市原市教育委員会 埋蔵文化財調査センター
発行	藤本電業株式会社 市原市教育委員会 〒290-8501 千葉県市原市国分寺台中央1丁目1番地1 TEL 0436-22-1111（代表）
印刷	株式会社三造ビジネスクリエイティブ 〒290-0067 千葉県市原市八幡海岸通1番地 TEL 043-41-0201